

大した予備知識も持たず、インド系アメリカ人ターセム・シンの監督した『落下の王国』（2006）を見て、いたく感動を覚えたのは何故かを考えてみました。この作品が2006年に公開されたときは、全米でも限定的なものだったらしく全世界での興行収入は僅か300万ドルに過ぎなかったとあります。制作費が3000万ドルをかけた作品ですので大赤字の作品です。本作は「スパイク・ジョーンズとデヴィッド・フィンチャーが“プレゼンツ”したと書かれています。ターセム・シン（1961~）とデヴィッド・フィンチャー（1962~）の関係について、この“プレゼンツ”の意味は、強力なサポートといった意味のようです。フィンチャーはターセムのヴィジョンを「もしアンドレイ・タルコフスキーが『オズの魔法使い』を作ったような」という実に的を得た表現をしています。ターセム・シンはこの後デヴィッド・フィンチャー監督作品で大ヒットした『ベンジャミン・バトン』（2008）のB班監督を務めます。（余談ながら黒澤明が『トラ・トラ・トラ』を撮っていたときのB班監督は佐藤純彌でしたし、サム・ペキンパーが黒澤明がウエスタンを撮ることがあれば、自分はB班監督を務めたいと語ったことがありました）

アメリカでは「何年も廃盤になっていた『落下の王国』が、（2024年）9月下旬から劇場で再上映され、アートハウス系ストーリーミングサービスMubiでも再公開されることになった」そうです。映画評論家や一部の熱狂的なファンから高く評価され、カルト的な人気を博し作品ではあったようです。日本では2025年に4Kデジタルリマスター版がリバイバル公開され、公開10日間で興行収入1.1億円を突破するなど、17年の時を経て異例のヒットを記録し、何とも嬉しい限りです。日本で最初に公開されたのは2008年のことで、ミニシアター系を中心に比較的小規模な公開だったようで、その年のキネマ旬報ベストテン選出の状況を見ると、映画評論家の北川れい子氏のみが1点を入れただけで、149位という結果でした。当時「圧倒的な映像美」は評価されましたが、監督が私財を投じて長期間かけて撮影したという制作背景や、美術・衣装デザインを担当した石岡瑛子氏の功績などは、熱心な映画ファンの間で話題になる程度でむしろ一部の映画ファンには「カルト的な作品」という位置づけだったということです。2024年のリバイバル上映に関しては、「ターセム・シン監督自身が主導し、散逸していたオリジナルファイルや未完成だったVFXシーンの素材を世界中から集めて、新たに4Kレストア（修復）版を完成

させた」とあるので、当時はまだ不完全なヴァージョンであったことは否めないようです。

さて、ストーリーですが舞台は1920年頃のカリフォルニア、それもL.A.周辺でしょうか、映画が「フリッカー」や「ムービング・ピクチャーズ」と呼ばれていた時代であり、主人公のロイはスタントを職業とし、撮影中の“落下”で入院生活を余儀なくされます。今後の暮らし向きや愛する女性の寝返りで情緒不安な精神状態の中で、ルーマニア移民の5歳の女の子でオレンジ畑で木から“落下”し腕を骨折したアレキサンドリアと知り合い、せがまれるままに壮大な物語を展開し話していくこととなります。神話的であり、また千夜一夜物語的な趣のある話であり、壮大な復讐劇であり冒険譚でもあります。本作には、映画としての楽しさを十分に堪能できる条件が揃っているように思えるのです。大島渚がその著書（『魔と残酷の発想』1968年発行）の中で言う「映画の歴史を調べてみればわかるように、そもそものはじめは映像が中心だったわけです。動く画であればよかったです。それがその後見せ物化して段々と筋のあるものになって来た。そういうものの方が商売になって来て、映画はストーリー中心に移って来た」のであり、「映画は誰が何と言おうと、ショービジネスの一種なのです。はっきり言ってしまえば、見せ物なのです。縁日のクマ娘やロクロ首と大差ないものなのです。映画を作る側も見る側も、長い間このことを忘れて来たのではないのでしょうか。双方がまずこの一点を確認しあうことこそ、互いに期待を裏切られないための第一歩だということが言えることが、この作品を見ていて納得できるように思えてきました。「フリッカー」や「ムービング・ピクチャーズ」としての作品の要素を持ちながら、予定調和を超えた奇想天外な面白さにあふれていると言えます。ターセム・シンの発想の出発点が映像にあったのかもしれませんが。大島渚の言葉をさらに借りると、「ストーリーというのはわかりやすいし頭に残りやすい。（中略）しかし、十年前に見た映画を思い出して『よかったなア』と思う時に、頭に浮かべているのはあるショットの映像ではありませんか。ストーリーは忘れても映像は残る」ものだと思います。この作品の映像は実に強烈な色彩感と世界遺産でのロケを通じてのあまりに現実離れた特異な世界へと導いてくれる胸踊る陶酔を味合わせてくれます。これは、ターセム・シンの映画に対しての深い愛情を示すものであり、ラストのシーンで女の子アレキサンドリアがサイレント映画界のスタントマンたちの活躍したモンタージュ映像を見つめながら、彼らをロイの姿と重ね合わせるシーンが出て来ます。これも映画に対する、それも映画制作を支える人たちへの想いを表現するものだと思います。

本作では、現実と空想とが融合された形態で映像化されますが、元々アレキサンドリアを喜ばすためのロイの作り話であり、いつしかロイはその作り話の中に絶望と苦悩を反映させることになり、まさに精神的”落下”を表現します。これは、彼の聖精神的”落下”と言えます。しかし、”落下”からの立ち直りが、ハッピーエンドへの序奏となり得ます。このあたりは、ターセム・シンの映画作家としてのイマジネーションとエンタテインメント性の表現を最大限に発揮したところではないでしょうか。通常映画の最後を飾る「THE END」が本作では「THE FALL」と出てくるところは何と洒落た趣向ではないでしょうか。

注) 「フリッカー」について

映画初期の時代に「フリッカー」という言葉は映画そのものを意味する言葉ではありませんでした。映画が上映される際に映写技術の未熟さから、実際に上映される映像に物理的な「ちらつき」(flicker)が頻繁に発生していたため、この言葉が関連付けられました。「映写技術や映写機」そのものの技術的な欠点にことです。観客としては映画を揶揄する言葉として使われたものと思われれます。